1

都会のマンション　北岡家　壮祐の部屋　（夜）

室内に壮祐と、その家庭教師：棚橋雄大がいる。
雄大はテキストに丸つけをしている。
ベッドに大の字に寝転がっている壮祐。時計カチッ。

壮　祐「あと1分だよ」
雄　大「うん」
壮　祐「はぁ。あんま腹へってないなぁ」
雄　大「なんで？」
壮　祐「さっき菓子食っちゃったから」
雄　大「いいの？（いいんだ？という感じで）」
壮　祐「内緒に決まってんじゃん」
丸付けが終わりテキストをパタンと閉じる雄大。
雄　大「よし」
ガチャリと子供部屋の扉が開き、
母親：ゆりが顔を出す。
ゆ　り「先生。お夕飯、食べて行かれますよね」

2

北岡家のダイニング　（夜）

ゆり、壮祐、雄大の３人で囲む食卓。

ゆ　り「いただきます」

手を合わせる。

ゆ　り「ほらっ、そう（すけ）。いただきます」

壮祐、無視して食べ始める。

雄大、黙って軽く手を合わせて食べ始める。

ゆり、雄大に「すみません」といった感じで頭下げる。

ゆ　り「先生来てもらってからどう？集中出来てるの？」

壮祐無言。

ゆ　り「どうですか？」

雄大に聞く。

雄　大「えぇ。ちゃんと」

ゆ　り「そうですか。（壮祐に向って）先生みたいな優秀な人来てくれるなんて、ありがたい事なんだからね」

壮祐無言。

ゆ　り「今、同じ学年の子は何人なんです？」

雄　大「今は壮祐君だけです」

ゆ　り「そうですか」

壮祐、席を立ち、部屋に戻っていく。

あっけににとられてる様子のゆり。（諦めの様子）

3

北岡家　玄関　（夜）

ゆりが雄大を見送る。

ゆ　り「あの、あの子、大丈夫でしょうか？」

雄　大「だんだんとペースは上がってきてますし、

本人もじきに手応えを感じるてくると思います」

ゆ　り「あ、はぁ。そうですか」

雄　大「・・・」

ゆ　り「反抗期っていうんですかね。初めてで。

ちょっと戸惑ってます」

雄　大「・・・そういう時期でしょうから」
ゆ　り「そうですか。そうですよね。
あ、来週もよろしくお願いします」
頭下げる。
雄　大「はい。では」
雄大去っていく。

4

派遣家庭教師センター　前の道　（夜）

雄大、歩いてくる。センター入り口に入っていく。

5

センター　事務所内　（夜）

戻ってくる雄大。休憩室の入り口辺りに
たむろしている同僚の女達がそれを見て
森華枝、鈴木ジュン子「おつかれさまでーす」
雄大、ボソッと言ったか言わないかの

返事をして頭を下げ、自分のデスクに行き、座る。

鈴　木「愛想ない人ねっ」

森　「でもちょっとかっこよくない？」

鈴　木「えーそう？どこが。あ、これ食べる？」

チョコ出す。

森　「あ、これ限定の」

鈴　木「ペパーミント」

森　「わーい。向いのコンビニ見たけど、なかったんだー」

チョコをモグモグ。

鈴　木「普段何してんだろうねー（別に興味はない様子で）」

森　「私知ってるもーん」

鈴　木「え、何？ほんとに棚橋さんの事好きなの？」

森　「ふふふ」

鈴　木「何知ってるの」

森　「秘密ー」

鈴　木「なによー」

6

森華枝の回想　公園　（昼）

森が友達数人と公園を歩いていると、
人だかりを見つける。
その中に、路上演奏をしている雄大がいる。
雄大は家庭教師の時とは全然違う雰囲気。
家庭教師の時の眼鏡はコンタクトに変わっていて、
服もあか抜けている。その姿を見て驚く森華枝。

7

森華枝の回想空け　センター事務所内　（夜）

森華枝が自分のデスクに戻ってくる。隣の席が雄大。
話を切り出すように、

森　「棚橋さんって、音楽、してるんだね」
雄　大「え、・・・うん」
森　「路上で。見ちゃって」
雄　大「そうですか」

森　「全然イメージと違うからびっくりしたぁ」

雄　大「まぁ。仕事とは別なんで」

森　「そっかー。曲聞いてみたいな。CDとかないんですか？」

雄　大「・・・」

雄大、少し考え、カバンからごそごそと

CDを取り出し、渡す。

森　「わーありがとう」

と言って、CDを開けて中身を見る。

森　「へー。・・・聞くね」

と言って、CDの中身を見ている。

雄　大「お先に失礼します」

と言って帰る雄大。

森　「おつかれさまでーす」

と言い、パソコンに向う。

8

北岡家　キッチン　（夜）

キッチンでは薄明かりの中、調理中のゆり。
夕飯の準備。包丁で何か切ってる。（アップ）

9

壮祐の部屋　（夜）

机に向っている壮祐と雄大。テキストをやっている。

雄　大「ここの途中の式書いてないけど」

壮　祐「ん？」

雄　大「書いて」

壮　祐「なに先生。俺がズルしたと思ってんの？」

壮祐を見る雄大。

壮　祐「しないよそんなの」

雄　大「いいから」

壮　祐「・・・」

雄　大「どうやって解いたか、確認するから」

言われて、書く壮祐。

雄　大「やっぱり。ほら、ここ。違うだろ」

雄大テキストをペンで指し示す。

壮　祐「え。あ」

雄　大「答えが合ってたらいいってもんじゃないから。
どうやって答えを導きだしたか。それが重要」

壮　祐「先生っぽい台詞だね」

雄　大「先生だから」

壮祐、けしごむで消して書き直している。

壮祐、時計を見る。

壮　祐「あと1分」

雄大も見る。ガチャン。玄関の音。父帰宅。

壮祐、扉の方に目をやり、テキストの直しを続ける。

10

北岡家　リビング　（夜）

父：英司、雄大、壮祐がテーブルに座っている。

ゆり、食事の準備。

英　司「正直なところ、栄晃大山、どうでしょうか？」

雄　大「・・・初回の模擬の結果は、思うところに
届きませんでしたが、壮祐くん頑張っていますから、
大丈夫だと思います」

英　司「そうですか。先生がそう言ってくれるなら、
本当に安心してお任せできますよ。
家の子はおとなしいでしょうけど、まじめなんで、
やれば出来ると思うんですよ。
やれば出来るんですから、
可能性は大事にしてあげたい。
この子には、人に誇れる仕事をして欲しいんですよ。
医者でもいいし、弁護士とか、国に関わる仕事とか。
いい仕事を選択出来れば、
子供の人生全体を助けてくれると思うんですよ。
だから今からその土台を造っておかないと
いけないと思うんです。
まぁ今は大変かもしれませんが、
大事な時期ですから、厳しく、お願いします」

黙ってうなずく雄大。

英　司「先生はたしか、成蹊大（せいけいだい）でしたよね？」

雄　大「あ、はい」

英　司「現役で入られたんですか？」

雄　大「はい」

英　司「素晴らしいな。ですが、

なんで派遣の家庭教師なんかを？」

雄　大「まぁ。・・・いろいろと」

英　司「うちとしては、優秀な方に教えてもらえる事は

ありがたいですけどね。

先生、失礼ですが、おいくつでした？」

雄　大「・・・26です」

英　司「今はフリーターのようなもんですよね？

今後どうされるんです？

いつまでもこのままって訳にはいかないですよね」

ゆり、食事を運んできながら

ゆ　り「ちょっと。そういった事は」

英　司「ん？なんだ（ゆりに反発するように）」
英司の携帯電話にメール着信。
英　司「あ、悪い。また出なきゃならない」
ゆ　り「え、あ、そうですか」
電話をいじくりながら玄関に向う英司。
英　司「先生、すみません。せっかくお話出来る機会だったのに」
雄　大「あ、いえ」
英　司「また今度。ゆっくり。では」
ガチャン。出ていく。残った、３人。
ゆりは食べましょうかという感じで席につく。

11

壮祐の部屋　（夜）

ボール手にしながら寝転がっている壮祐。
帰る支度をしている雄大、
カバンから書類の束（宿題プリント）を出している。
雄　大「お父さんって、何されてる方なの？」

壮　祐「仕事？」
雄　大「うん」
壮　祐「知らない。興味ない」
雄　大「・・・。これ次回までに」
宿題の束を机に置く。
壮　祐「はーい」
壮祐、寝転んだままボールを壁に打ち付けて
壮　祐「先生は、勉強好きだったんだ？」
雄　大「どうだろう」
壮　祐「好きだったから頭いいんでしょ？」
雄　大「まぁ、別に嫌いじゃなかったかな」
壮　祐「そっか。俺は嫌い。先生が来てくれるから、
それだけでやってるけどさー。
何でやってるのか分かんないし」
雄　大「将来の役に立つからじゃない？お父さんも言ってただろ」
壮　祐「先生、変な事言うね。先生の将来の役に立ってるの？」
雄　大「・・・」

壮　祐「せっかくいい大学出て、人に誇れる仕事ってやつ、
出来る可能性あったのに。
なんで生意気な子供の相手してんのさ」

雄　大「・・・」

壮　祐「そうじゃないやりたい事あったからじゃないの」

雄　大「・・・」

といいながら壁にボールを打つ。
壁には「栄晃大山高校　合格」の文字が書かれた紙。
そこをめがけている。それに気付く雄大。

壮　祐「これはね。父親が勝手に貼ったの。
おれの気持ちなんかじゃないから」
バンバンと紙にボールを打つ。

雄　大「壮祐の気持ちは？」

壮　祐「・・・」

雄　大「やりたい事あんの？」

壮　祐「先生、俺の事馬鹿にしてんの？」
と起き上がる。雄大を見る壮祐。

壮　祐「あるよ」
雄　大「何？」
壮　祐「まだ秘密」
ボールを相変わらず壁に打っている壮祐。
カバンを持ち
雄　大「じゃ」
と言って部屋を出る。
ボールを打ち付けるのをやめる壮祐。
宿題のプリントの束の間に挟まっているCDを見つけ、
見つめている。

12

公園　（昼）

雄大、路上ライブをしている。
そこそこの人だかり。

13

派遣家庭教師センター　（夜）　雄大の回想

作業をしている雄大。隣の森のデスクには、
渡したCDがそのまま置いてある。聞いてない様子。
雄大、離れた場所にいる森に目をやると、
森は鈴木ジュン子と休憩場所でしゃべくっている。

鈴　木「もうその子が生意気で大変だってのは、本当前から
有名な事なんだから。本当に。何かあればまた
片山家かーって言ってただんだからさ」

森　「えー。どうしよう」

鈴　木「で、前の島田さんってのが（と言いながらこそこそ話）」
センター長：小沢が雄大の席に来る。

センター長「棚橋くん、おつかれさま」

雄　大「おつかれさまです」

センター長「人事からもちょっと聞いたと思うけど、社員の件。
どうかな？」

雄　大「その、まだちゃんと考えれてなくて」

センター長「黒川さんね、長期で抜ける事になったからさぁ。

まぁね、振り分けはね、
ある程度問題ないんだけどね。
タイミング的にもどうかなって思ってたんだけどね」

雄　大「はい・・・」
センター長「どう？」

14

公園　（昼）　回想あけ

演奏が終わり片付けている雄大。

15

公園　（昼）　別の場所

雄大歩いていると、ゆりをみかける。

16

公園　広場　（昼）

ゆり、青空ヨガの講師をしている。

生徒は15名程度。芝生にタオルをしき、
ヨガのポーズをとっているゆりと生徒。
ゆ　り「悩みや普段抱えている事、イライラや疲れを、
全部手放していきましょう。
はい吸ってー。最後まで吸ってー。
吐きましょう、ふー」
と言いながらポーズ。生徒も続いてポーズとる。
ゆり、雄大に気付く。
レッスン中、チラチラ雄大を見て、目線が合う二人。
（インサート：ギターを弾いている雄大。
壮祐の通知簿を手に取り、ゆりを責めている英司。
紙に「栄晃大山高校　合格」と書き、
壮祐の部屋に向う後ろ姿。）
ゆりのアップ
（インサート：リビングの席を立ち、
自分の部屋に戻る壮祐の後ろ姿。）

×　×　×

ゆ　り「驚きました。うちにいらっしゃる時と随分違うから」

帰っていく生徒達の画に台詞のせる。

ゆりと雄大、ベンチに座っている。

雄　大「・・・」

ゆ　り「眼鏡、［ダテ］なんですの？」

雄　大「いや、これコンタクトなんで。北岡さんも、

（ゆり、雄大を見る）意外でした」

ゆ　り「あたし？そうですか？」

雄　大「ヨガの先生ですか」

ゆ　り「そうなんです。ボランティアなんですけどね。

週一回青空ヨガで」

雄　大「そうですか」

ゆ　り「ふふ。わたしがヨガの先生だなんて。

見えなかったですか？」

雄　大「え、あ、まぁ」

ゆ　り「そうかもしれないですね。私だって、
家に閉じこもりきりの主婦、だけじゃないんです。
両面あるから。バランスが取れてるんですよ」
雄　大「・・・」
ゆ　り「じゃあ先生、また火曜日。よろしくお願いします」
と言って去っていくゆりの後姿。雄大も立ち上がる。

17

北岡家のマンション　廊下　（夜）

雄大、北岡家の玄関前まで歩いてくる。

18

北岡家　玄関前　（夜）

ピンポーン、雄大チャイム鳴らす。
ゆ　り「はーい」
ガチャリ扉が開き、ゆりが出迎える。
ゆりの額から血が流れ出ている。

雄大それを見て驚く。ゆりは気付いていない様子で

ゆ　り「あ、先生。どうぞ」

雄　大「あ、あの」

ゆり何？という表情。

雄　大「大丈夫ですか？」

ゆ　り「え、（つくろうように）大丈夫ですよ。え？」

フェードアウト。

フェードイン。

19

北岡家　リビング　（夕方）

ゆりが（呼び出された）壮祐の学校から帰宅する。

壮祐の部屋から大音量の音楽が聞こえている。

びっくりしながら、壮祐の部屋前に行き、

ゆ　り「そう（すけ）。何、大きな音で。下げて」

と部屋の扉を開けようとするが鍵が閉まっている。

ゆ　り「ちょっと壮祐。開けなさい」

ノブをがちゃがちゃする。（丸のぶだった場合は、
カバーがしてあり、それをはがすのを入れる）

ゆ　り「壮祐！」

呼びかけても音量変わらないので、
リビングの戸棚に行き、引き出しをあける。
中の箱を取り出し、その中の小箱を開けて、
部屋の鍵を取り出す。（マトリョーシカ）
これで開けてやるわよ、という勢いで
壮祐の部屋に行き、鍵を開ける。

ゆ　り「壮祐」

と扉を開きかけるが、
中の壮祐から押し返されてしまい、
体よろけて倒れ込む。
何かの角から飛び出した釘で頭を打ち付けてしまう。

ゆ　り「うっ。いつっ・・・」

釘のアップ。
ピンポーン。

ゆり、額から血が出始めている事に気付かず
よろめきながら立ち上がって、

ゆ　り「はーい」

玄関に向う。

20

北岡家　リビング　（夜）

ゆり、壮祐、雄大が座っている。
ゆりの額にばんそうこう。カバンをゴソゴソ探り、
テスト用紙を取り出しながら

ゆ　り「これどういう事」

テスト用紙をテーブルに置く。白紙の状態。
雄大も驚いて壮祐を見る。

ゆ　り「なんか言いなさい」

黙っている壮祐。雄大が壮祐を見ているのを見て、

ゆ　り「あなたですか」

雄　大「え」

ゆ　り「あなたが壮祐に吹き込んだんでしょ」
雄　大「いや・・・」
壮　祐「先生は関係ない。人のせいにすんなよ。
　　俺の事なんか父さんの言いなりなくせに」
ゆ　り「・・・とにかく、お父さんには報告しますから。
　　分かったわね」
壮　祐「・・・」
ゆ　り「あの、今日はもう帰って頂けます？
　　勉強どころじゃないですし」
雄　大「分かりました」
　　席を立つ雄大。玄関へ向う。
壮　祐「先生っ」
雄　大「（振り返り）・・・」
壮　祐「これ、めちゃくちゃかっこよかった。本当に。
　　すげー良かったよ」
　　と手にCDを持っている。
　　ゆり、それを見て、雄大を睨む。

壮　祐「これもらっていい？」
雄　大「あ、あぁ」
壮　祐「また聞かせてね」
ガチャン。父帰ってくる。
英　司「ただいま、と、あ、先生。こんばんわ」
雄　大「どうも。失礼します」
英　司「あ、あぁどうも」
雄大玄関を出ていく。

21

派遣家庭教師センター　（夜）

壮祐の事を考えながらセンターに戻る雄大。
森のデスクにはCDが置いてあるまま。雄大、着席。
鈴木は帰るとこ。
鈴　木「じゃねー」
森　「うん。お疲れさまー」
と言ってドアのところまで見送り。

終わってから自分の席に戻ってきて

森　「棚橋さん、おつかれさまです」

雄　大「おつかれさまです」

森　「あの、この近くに安くておいしい焼き肉屋さん
見つけたんですけど、今度行きませんかー？」

カバンから書類を取り出したり用事をしながら
聞いている雄大。

雄　大「はぁ」

森　「行きます？」

雄　大「あぁ」

森　「じゃあ今度の日曜日。ここ終ってから」

雄　大「あの」

森　「なに？」

雄　大「これ聞いてくれました？」

といってCDに触る雄大。

森　「あ、まだ・・・」

雄　大「聞かないなら返してください」

といってCDを取ってデスクから去っていく。

22

派遣家庭教師センター　入り口（夜）

受付の所でセンター長に出くわす

センター長「あ、棚橋くん。こないだの話しなんだけど・・・」

急ぎ足で歩きながら雄大、

雄　大「すみません。せっかくなんですけど、お断りします」

センター長「あ、えっ。そう。なんで？せっかくなのになぁ」

雄　大「僕、やりたい事あるんで。いまやってるんで。

まだ、考えられないです。

もうちょっと頑張ってみたいんで。

すみません。ありがとうございました」

と頭を下げて玄関を出ていく。

センター長「そう・・・」

とあっけに取られている。

23

北岡家のマンション　廊下　（夜）

雄大、北岡家の玄関前まで走ってくる。

24

北岡家　玄関前

ピンポーン。呼び鈴鳴らす雄大。
ガチャリ、扉が開き、英司が出てくる。
頭から血を流している。
雄大、ギョッとして声も出ない。
フェードアウト
フェードイン

25

北岡家　リビング　（夜）

英司、ゆり、壮祐、テーブルに座っている。

英　司「どういう事なんだ」

黙っている壮祐。

英　司「なんとか言ったらどうなんだ」

と言って、壮祐を殴る。椅子から転げ落ちる壮祐。

ゆり、驚いて

ゆ　り「やめてください。暴力は」

英　司「何が暴力だ。しつけだろうが」

の間に、壮祐走って自分の部屋に入ってしまう。

追っかける英司。扉をあけようとするが、

壮祐の部屋には鍵がかかっている。

英　司「おい、鍵」

ゆ　り「あ、はい」

ゆり、リビングの戸棚に戻り、引き出しを開け、

一連の動作で鍵を取り出す。

鍵を壮祐の部屋前まで持って行き、

英司に手渡すゆり。

ゆ　り「はい」

鍵をあげる英司。部屋の中から壮祐を連れ出し、

（少し揉みあい）リビングの椅子に座らせる。

英　司「どういうつもりだ？え？」

黙っている壮祐。

英　司「あの先生に何か吹き込まれたのか？」

テーブルに置いてあるCDを手に取り

英　司「音楽、やってんだってな。

あの先生は優秀だったかもしれないが

今は単なるフリーターだ。

せっかくのチャンスを棒にふって、

みっともない事なんだぞ」

と言ってCDを捨ててしまう。それを見て、

壮祐怒りがわき起こり

英　司「お前には人に誇れる仕事をして欲しいって」

と話す英司を突き飛ばし、

椅子を持ち上げて英司に打ち付ける。

英　司「うっ」

壮　祐「えらそうに言うな！誇れる仕事ってなんだよ。

どんな仕事だって、自分が好きでやってる仕事なら
誇れるじゃないか。八百屋さんだって、
弁当屋さんだって、ゴミ収集の人だって、
サラリーマンだって。すごい仕事じゃんかよ。
先生だって、夢追っかけててかっこいいじゃんか。
みっともないなんて言うな！」
ピンポーン。呼び鈴鳴る。
ゆり、腰が抜けてしまい、出れる状態じゃない。
壮祐は英司をさらに突き飛ばし、
ゴミ箱に捨てられたCDを拾おうとする。
英司玄関に向う。

26

北岡家　玄関　（夜）

ガチャリ扉が開くと、頭から血を流している英司が
出迎える。ギョットして、声が出ない雄大。

英　司「すまないが、帰ってください」

扉を閉めようとするが、押さえる雄大。

雄　大「あ、あの。ちょっとだけでいいんで。
壮祐君に言いたい事あって」

英司黙って扉を閉めようとする。

雄　大「あ、あの壮祐君、僕にやりたい事があるって、
話してくれたんです。
僕もなんか、いろいろ気付かされた事あって」

英　字「・・・」

雄　大「だから、少しでいいんで」

英司少し考えた後、黙って扉を開けて、
雄大を中に入れる。

27

北岡家　リビング　（夜）

雄大、リビングに入ってくる。それを見る壮祐。
（壮祐はCDについたホコリを取っている）
ゆり、冷静さを取り戻して、

ゆ　り「あなた大丈夫？救急車を」

英　司「大丈夫だ。・・・座ってください」

と雄大に椅子を示す。

ゆり、タオルを取ってきて、英司に渡す。

英司、受け取り、額の血を拭う。

雄大が座り、壮祐もうつむきながら座る。

続いてゆり、英司も座る。

英　司「自分では、

厳しくていい父親だと思ってたんだけどな・・・」

と血を拭い終わり、

英　司「で、壮祐。お前何がやりたいんだ」

と壮祐を見つめる英司。

うつむいていた壮祐、顔を上げ、父を見る。

フェードアウト

28

公園　（昼）

路上で練習をしている雄大。
そこへゆりがやってくる。

ゆ　り「先生。お久しぶりです」
雄　大「（頭を下げて）もう先生じゃないですから」
ゆ　り「・・・」
楽譜を見るゆり。
ゆ　り「作曲ですか」
雄　大「まぁ」
ぎこちない二人の空気感。
雄　大「壮祐くん、勉強は、どうですか？」
ゆ　り「頑張ってます。前よりも、もっと、自主的にやってます」
雄　大「そうですか」
晴れ晴れした表情の雄大。
ゆ　り「先生、また家、来てください」
雄　大「もう、先生じゃないんで」
ゆ　り「壮祐にとっては、先生ですよ。これからも」

雄大、黙っている。

29

公園　芝生のある場所　（昼）

青空ヨガのレッスンをしているゆり。
前より生き生きとした表情。
遠くから見ている雄大。
ゆ　り「イライラや悩み事、そして抱えている不安は
呼吸とともに手放していきましょう。
吸う息とともに」
といってポーズ。それに続く生徒達。
歩き出す雄大。

おわり